カントにおける「時間の流れ」

滝沢正之

はじめに

（1）本稿の課題

本稿は、イマヌエル・カントの主著『純粋理性批判』を手がかりに、「時間が流れる」という事態についての哲学的な検討を行うものである。時間の流れはさまざまな哲学的な問題を提起するが、本稿は時間の流れをとりわけ時間の連続性という観点から考察する。ちなみに、カントにおいて、時間の連続性についての考察は、おもに質のカテゴリーにかかわる諸議論に位置づけられている。つまり、本稿の作業は、『純粋理性批判』における質のカテゴリーの役割について、一定の解釈を与えるものでもある。(1)

（2）時間の流れと時間の連続性

我々はしばしば「時間が流れる」という表現を使用する。複数の言語に類似した表現がみられることから、この表現は、我々にとって時間がどのようなものであるか、ということについて、なんらかの本質を突いていると考えられる。しかし、この表現が実際のところなにを意味しているのか、とあらためて問われると、

我々は口ごもらざるをえないであろう。本稿の目的は、この感覚的にしっくりくる表現において、我々がいったいなにを理解しているのか、ということの一端を明らかにすることにある。

時間の流れということがらについては、複数の接近の仕方が可能である。本稿では、時間が流れるということを、おもに時間的な現象が連続性をもつということから考えたい。現在が過去になり未来が現在になるといった時間様相の推移なども、時間の流れを論じるさいには避けて通れない論点をなすだろうが、本稿では扱わない[2]。さらに、しばしば指摘されることだが、精確には、時間そのものは流れないはずである。流れるのはまずもって川の水や山肌の霧などであり、また、少々意味を拡張したとしても、飛ぶ矢や走る亀などであるはずだ。すなわち、「時間が流れる」という表現で我々は、あるものごとが流れように生成、消滅、運動、変化することを許すような、なんらかの時間の性格を指しているのである。まとめれば、本稿が論ずべきは、諸現象に流れるということを許すような時間の性格、ということになるだろう。

では、ある現象について、たんに、生成したり消滅したり運動したり変化したりしている、というだけでなく、流れている、という特徴づけをも行うことを許すのは、時間のいかなる性格であろうか。一般に、連続性という概念にたいして離散性という概念を対置することができる。そして、時間においてある現象が流れうる、ということは、そもそも時間が連続的である、ということを含意するように思われる。逆にいえば、もしも時間が離散的であるならば、時間においてはいかなる現象も流れることはないように思われるのである。このような連続性と離散性の概念について、少々時代は下るが、ショーペンハウアーがわかりやすい表現を与えてくれているので、引いておきたい。

時間は一つの連続量（Quantum continuum）であって、離散量（Quantum discretum）ではない。実際、充たすもののない時間といったものは知覚できず、そのような時間があれば、我々の経験という統一性全体が廃棄されるだろうから、時間のどの部分にもなんらかの現象があらねばならず、したがって現象の系列も一つの連続であらねばならない。さらに次のような事情がある。現象はすべて、状態の変転する客観からなっている。すでに詳しく述べたように、状態の変転とはすなわち、ある状態がそれに先行する他の状態につねに続くことにほかならない。それゆえ、状態もまた一つの変転でなければならない。以上より次のことが帰結する。時間の連続は、相互に継起するにあたりあいだになにものも介在させる必要のない状態の連続をとおして充たされているのである。[3]

連続性と離散性にかんするこのような理解は、現代の我々の目からすると粗雑にすぎるように思われる。[4] しかし、本稿の議論にとっては、これでさしあたり十分である。

ショーペンハウアーの理解を後論にあわせてもう少し具体化しておこう。ある現象の流れ、たとえば矢の飛行を考えてみよう。もしも時間が離散的であるとすれば、時間においては、各々の時点がそのあいだにさらなる別の時点を挟むことなく系列をなしていることになる。このとき、矢の飛行は、ある時点に矢がある位置に存在し、また、次の時点に矢が別の位置に存在する、そして、その二つの状態のあいだには、別の状態は存しない、というようなものになるであろう。我々はこのような説明にたいして、このとき、矢は飛んでいない、少なくとも、流れるようには飛んでいない、という直観をもつはずだ。すなわち、もしも時間が離散的であるとするならば、時間のうちで現象は流れていないように思われるのである。このように、時間

が連続的であることと時間が流れるということは密接に関係しているのである。[5]

かくして、本稿は、カントやショーペンハウアーの概念を借りるならば、時間が連続量 quantum continuum をもつということから、時間における流れを考察していくことになる。

1　「把捉の綜合」と時間の多様性

本稿はおもに質のカテゴリーにかかわる議論から時間の連続性を考えるものであるが、その作業に先立って、『純粋理性批判』第一版の「超越論的演繹」「三重の綜合」「直観における把捉の綜合について」の検討を行いたい。この箇所でカントが行っている表象の多様性にかかわる議論が、時間の連続性を論じる前段階をなしていると考えられるからだ。

カントによれば、我々の経験的認識は、多様な表象が綜合的統一されることにより成立する。まずは経験的な事例にそくすならば、舟が川を下っていくことは、上流の舟、中流の舟、下流の舟といった複数の事態を順に見ていき、それを取り纏めることにより認識されるというわけだ。ここで問題にすべきは、舟の運動の表象の構成要素をなす上流の舟、中流の舟、下流の舟といった多様な経験的表象の位置づけである。

「把捉の綜合」の記述によれば、経験的表象の多様性は、時間がもつ多様性にそくして確保される。経験的表象の多様性は、ある時間幅が任意の分割を許容する、ということに基礎づけられねばならない。

カントはまず、時間をあらゆる認識の基礎づけが帰着する場として捉える。

> 我々の諸表象は、それらが外的な諸物の影響をつうじて引き起こされるにしろ、内的原因をつうじて

引き起こされるにしろ、また、それらがア・プリオリに現象として生じるにしろ、あるいは経験的に生じるにしろ、それがどこからであろうと、それらの諸表象は心の変様として内官に属する。そして、そのようなものとして、あらゆる我々の認識は、結局は、内官の形式的条件すなわち時間に従うのであり、この時間において、それらの諸表象は総じて秩序づけられ、結合され、関係づけられなければならない。（A98f.）

表象の多様の綜合的統一は、すべて時間に基礎づけられる。そして、ここで着目すべきは、綜合や統一だけではなく、経験的表象がそもそも多様であることすらも時間にその基礎づけをもつ、ということだ。続く段落を確認してみよう。

各々の直観は多様なものをそれ自身のうちに含んでいるが、この多様なものは、心が時間を継起する諸印象の系列において相互に区別しなければ、そのようなものとして表象されないだろうものである。なぜならば、一瞬間のうちに含まれているものとしては、各々の表象は絶対的統一以外のものではありえないからである。（A99）

表象の多様性が成立するためには、与えられた表象が時間において分節化されなければならない。先ほどの例を再び使うならば、舟が川を下っていくという運動が多様な表象を含むということは、それが上流の舟、中流の舟、下流の舟といった諸表象へと時間において分節化されうることに基づく。もちろん時間以外の分

節化の論理もあろう。そもそも上流、中流、下流という区別は空間的位置によるものであるはずだ。しかし、もしもこれらの表象がそもそも時間によって分節化されえないのであれば、空間的な分節化も成立しえないとカントは主張する。すべての多様性は時間的な多様性に基礎づけられるのである。[6]

続く段落で、カントは基礎づけという論点を越えて、時間の多様性がそのものとして純粋に成立するということをも述べていく。しかし、以降の議論にかんしては本稿では扱わない。ここで強調したいのは、以上のような表象の多様性の確保の論理が、「把捉の綜合」として、以降の綜合の、つまりは純粋悟性概念の客観的妥当性の基礎づけの前提条件をなしている、ということである。少なくとも『純粋理性批判』第一版においては、我々にとってのあらゆる客観性や必然性は、時間の多様性に基礎づけられているのである。

さて、ここで確保された時間の多様性は、いまだ離散的な理解を許す余地を残したものである。この多様性が連続的なものとして捉えられる場面を次いで検討する。

2　質のカテゴリーと時間の連続性

（1）質のカテゴリーの問題圏

本節の課題は、「把捉の綜合」において語られていた時間の多様性をより明確な仕方で規定することである。それは、「超越論的原則論」におけるカントの質のカテゴリーにかんする議論を検討することでなされる。

「超越論的図式機能」によれば、あらゆるカテゴリーはその適用にさいして時間規定を図式としてもたねばならない。そして、質のカテゴリーは「時間内容」という時間規定を図式としてもつとされる。[7]（A137ff./B176ff.）この「時間内容」という時間規定の内実が「超越論的原則論」において語られることに

なる。注目すべきは、「超越論的原則論」の当該箇所で、時間の連続性が論じられていることである。後論を先取すれば、時間の連続性から、時間の多様性はより精確な規定を得るのである。

そこで、「超越論的原則論」「知覚の予料」および「第二類推」を順に検討していく。

（2）「知覚の予料」における連続性

カントは「知覚の予料」において、対象のもついわゆる性質を実在性という概念で語る。そして、実在性は、連続的な内包量をもつと主張する。

「知覚の予料」とは以下のような原則である。

> この［知覚の予料の］原理は、以下のことである。すなわち、あらゆる現象において、感覚の対象である実在的なものは、内包量を、すなわち、度をもつ。（B207）[8]

実在性は内包量をもつとされる。そして、以下の引用にあるように、この内包量のもつ論理はその連続性から捉えられる。ある感覚とその欠如の間には、ないしは、ある実在性とその欠如の間には、連続性が存するとされている。[9]

> さて、経験的直観において感覚と対応するものは、実在性（フェノメノン的実在性）であり、感覚の欠如に対応するものは、否定性＝0である。さて、あらゆる感覚は減少しうるものであるので、あらゆ

る感覚は減少し、そして徐々に消滅しうる。それゆえ、現象における実在性と否定性とのあいだには、多数の可能的な中間感覚の一つの連続的な連関が存し、その中間感覚の相互区別は、所与の感覚とゼロあるいは全面的否定との区別よりも、つねにより小さいものである。（A168/B209f.）

これが実在性における連続性である。たとえば一〇〇ルクスの明るさは、ゼロまで減じていくことができるが、そのうちに連続的な段階を採ることができるのである。

ここで先に確認した表象の多様性を想起されたい。そこでは舟の運動を例として挙げ、多様な表象として、上流の舟、中流の舟、下流の舟などを考えた。しかし、「知覚の予料」において考えられているのは一歩進んだ事態である。一〇〇ルクスの明るさについて連続的に中間段階を採ることができるということが、先ほどの表象の多様性に対応する。実在性の連続性とは、実在性が連続的に多様性を含む、ということを意味するのだ。[10]

では、このような実在性における連続性は、どこに基礎づけられるのか。カントは以下のように主張する。

このような量［連続量］を、流れる量とも呼びうる。なぜならば、それを産出することにおける（生産的構想力の）綜合は時間における進行であり、時間の連続性はとりわけ流れ（経過）という表現でしばしば示されるからである。（A170/B211f.）[11]

構想力の綜合における時間の連続性が、実在性の連続性を基礎づけているのである。

先に確認したように、表象の多様性を時間の多様性が基礎づけるのであった。しかるに、実在性における表象の多様性は連続性をもつ。これに対応して、基礎づけを担う時間の多様性もまた連続的なものとして把握されるのである。実在性の連続性を、まさに連続性として把握するかぎりにおいて、我々は時間の連続性に訴えねばならないとされていることになる。[12] カントの知覚論については他にも論ずべきことはあるが、本稿の問題意識を超えるので割愛する。[13]

（3）「第二類推」における連続性

続いてカントが因果論を展開する「第二類推」の後半部における議論を参照する。

因果性における原因としての力の発揮、また、結果としてのある状態の変化について、カントはその連続性を主張する。この連続性もまた時間の連続性に基礎づけられている。

カントの出発点は、同時因果の位置づけにある。「第二類推」前半部の議論は、原因と結果の関係を時間的先後関係と連関させている。しかるに、原因と結果が同時であるような事例が現実にはいくつもある。時間の順序と時間の経過を区別することで、カントはこの問題を解決する。同時因果であっても時間には順序があるとするのである。（A203/B248）

この主張には異論も多いが、さしあたり受け入れておく。[14] 本稿の課題からして興味深いのは、ここでカントが時間の連続性に言及することである。

まずカントは、原因と結果が因果関係を取り結ぶという図式から、実体が力をもち、それが発揮されるという図式を導き出す。（A204/B249）この図式に依拠することで、原因としての力の連続的な発揮、そして、

結果としての状態の連続的な変化という事態を表現することが可能になる。

かくして、問題は、いかにして物はある状態＝aから別の状態＝bへと移行するのかである。二つの瞬間のあいだにはつねにある時間があり、また、各瞬間における二つの状態のあいだにはつねに量をもつある区別が存する。（なぜならば、諸現象のあらゆる部分はつねにまた量であるから）。かくして、ある状態から別の状態へのあらゆる移行は、二つの瞬間のあいだに含まれるある時間において行われるが、その第一の瞬間は、物がそこから生じてくる状態を規定し、第二の瞬間は、物がそこへ到達する状態を規定する。かくして、両者は、変化の時間の限界、すなわち両状態のあいだの中間状態の限界であり、そのようなものとして共に変化全体に属している。しかるに、各々の変化は原因をもち、この原因は、そこで変化が起きている時間全体においてその原因性を証示している。それゆえ、この原因がその変化を生み出すのは突如に（一挙にあるいは一瞬間のうちに）ではなく、ある時間においてであり、だから、時間が最初の瞬間aからそれがbにおけるその完遂まで増大するように、実在性の量（b－a）も、最初と最後のあいだに含まれるより小さい度すべてをつうじて、産出されるのである。（A208/B253f.）

因果関係における結果が、対象のもつ実在性の変化として把握される。そして、この変化にかんして、連続性が主張されている。また、その連続性はある変化を多様な中間表象へと連続的に分割していくことができる、ということで理解されている。[15]

ここで「知覚の予料」との関係を確認しておこう。「第二類推」では、ある対象の変化がその実在性の量

的変化とされている。先に、そもそも内包量として連続的であるとされた実在性が、ここでは、時間のうちで実際に連続的に変化するのである。「第二類推」は因果性のカテゴリーに対応する箇所であるが、ここには質のカテゴリーの契機も組み込まれているのである。

さて、以上の引用にすでに明らかであるが、この変化の連続性もまた、時間の連続性に基礎づけられる。変化の連続性は、当然時間的であり、それがそのまま時間の連続性に基礎づけられたものとして理解されている。

> さて、これがあらゆる変化の連続性の法則であり、この法則の根拠は以下のことである、すなわち、時間も、時間における現象も、最小部分であるような諸部分から成るのではない、そしてなお、物の状態は、その変化にさいしては、要素としてのこのすべての部分をつうじて、その第二の状態へと移行するのである。（A209/B254）

因果的変化が連続的であることもまた、時間の連続性に訴えることなくしては存しえないとされるのである。

（4）時間の連続性の位置づけ

前節では、「把捉の綜合」から、時間の多様性が純粋悟性概念の客観的妥当性を基礎づけることを確認した。本節では、それをさらに具体化し、実在性および因果性を基礎づける局面を検討したことになる。この

とき、時間の多様性は連続的なものとして、つまりは時間の連続性として捉えられるのである。

3　時間の連続性と無限分割の問題

（1）無限分割のアポリア

これまで確認してきたように、カントは時間について、その連続性を主張する。そして、その連続性は、分割を反復しうる、ということから理解されている。ここで、このような連続性の位置づけが、無限分割の可能性を前提とするように思われることに着目したい。時間の連続性とは、時間においてア・プリオリに無限の多様性が存することを認めることであり、時間において無限な分節化を認めることでもあると思われるのである。

しかるに、時間に無限分割を導きいれることがアポリアを招来する、と考える哲学説が存する。それは、無限分割の終局を語ることが難しいからであろう。たとえばデイヴィッド・ヒュームは、時間は連続的ではなく離散的だとして以下のように述べる。

> それゆえ、時間は、それが存在するかぎりにおいて、不可分の瞬間から構成されなければならないことは確かである。なぜならば、もしも時間において我々が分割の終りにけっして到達しえないのならば、また、もしも継起する各々の瞬間が完全に単純であり不可分でないのならば、無限数の同時に存在する瞬間つまり時間の部分があることになってしまうだろうから。私の信ずるところでは、このようなことは途方もない矛盾とされるであろう。(16)

無限な諸部分が結局のところ同時的になってしまう、というヒュームの主張はいささかわかりにくい。しかし、少なくとも時間の連続性という主張が無限性にかかわるがゆえの難点をもつことは確かである。では、カントはこの問題についていかなる態度を採っているのであろうか。

（2）「第二アンチノミー」における無限分割

『純粋理性批判』において無限分割の問題を扱っている箇所は、言うまでもなく「超越論的弁証論」「第二アンチノミー」である。そして、「第二アンチノミー」は、これまで本稿が扱ってきた箇所と同じく、質のカテゴリーに対応した箇所でもある。ここからどのような洞察を読み取ることができるであろうか。

「第二アンチノミー」の定立は以下のようなものである。

> 世界における各々の合成された実体は単純な諸部分から成立しており、そして、どこにも、単純なもの、もしくは、単純なものから合成されているもの以外は存在しない。（A434/B462）

また、反定立は以下のようなものである。

> 世界におけるいかなる合成されたものも単純な諸部分から成立しておらず、そして、世界においてどこにも単純なものは存在しない。（A435/B463）

ここでまず注意すべきは、「第二アンチノミー」には無限分割の問題は確かに扱われているが、そこで分割されているのは、なんらかの実体、より精確に言えば、なんらかの実体のもつ実在性であって、時間ではない、ということである。これまでの議論を想起されたい。連続性の問題は、まずもって現象的実体のもつ実在性の連続性にそくして捉えられていた。無限分割の問題もまた、まずもって実在性の無限分割にそくして捉えられているのである。[17]

さて、「知覚の予料」および「第二類推」において、カントは実在性の連続性を時間の連続性に基礎づけていたのではなかったか。もしそうだとすれば、「第二アンチノミー」における実在性の無限分割もまた、時間そのものの無限分割に基礎づけられるはずであろう。

ところが、我々のこの期待は肩すかしにあう。奇妙なことに、カントは「第二アンチノミー」において、時間の無限分割について語っていない。その代わりに、カントは分割の無限反復に言及してしまっているのだ。

カントによる「第二アンチノミー」の解決を確認してみよう。「純粋理性のアンチノミー」第八節「宇宙論的理念にかんする純粋理性の統制的原理」、そして、第九節「あらゆる宇宙論的理念にかんする理性の統制的原理の経験的使用について」の第二項「直観における一つの与えられた全体の分割の総体性についての宇宙論的理念の解決」、これら二箇所における議論は、以下のようにまとめることができる。

カントによれば、ある現象について「この全体は無限の部分から成り立っている」と言うことはできない。(A524/B552) そもそも無限分割は、無限に分割をせよ、という純粋理性の原理として解されるべきなのであり、このとき、この原理は「客体がなんであるのかを語りうるのもではなく、客体の完全な概念に到達す

るためには経験的な背進がいかにして試みられるべきなのかを語るもの」なのである。（A509f./B537f.）すなわち、無限分割とは、所与の全体を無限に分割せよ、という分割作業の指令においてのみ意味をもつのであって、そこでは最小単位の存在は前提されていないのである。[18] カントの言葉を借りるならば、無限分割を指示する原理は統制的なものにすぎないのであり、分割の終局としての最小単位は、原理的に直観に適用されることがなく、また、適用される必要もない、たんなる理念へと、その存在論的地位を割り引かれるのである。

このカントの解決は、そのものとしては理解できるが、これまでの本稿の議論からすると、問題含みのものと見なさざるをえないものである。

実在性の無限分割は、理念としての最小単位へと背進していくような分割が無限に反復されうる、ということとして位置づけられている。ここで問題になるのは、分割の無限反復がなんらかの連続性を含意することなく成立しうる、ということである。分割が反復されるとしよう。ある一回の分割とその次の回の分割とは別個の行為である。そして、この二つの行為が併せて一つの連続した行為を形成する必要はここにはない。別個の分割が無限に反復されさえすればいいのであって、それぞれが連続していなくともよいのである。すでに本稿はカントの「超越論的原則論」の叙述から、実在性の連続性を基礎づけるのは時間の連続性である、という主張を読み取っている。しかし、「第二アンチノミー」においては、実在性の無限分割は時間の無限分割に言及することなしに説明されてしまっているのである。このようなカントの説明の錯綜を整合的に理解するためには、どのような解釈が要求されるのであろうか。

（3）時間はいかにして表象されうるか

問題は以下のように整理できる。

実在性の連続性は時間の連続性に基礎づけられるとされている。しかし、その一方で、実在性の連続性は分割の無限反復に基礎づけられてもいる。ところが、分割の無限反復は、時間の連続性を要求しない。時間の連続性は基礎づけに必要なのであろうか、それとも不要なのであろうか。

この混乱を解消するために、ここで新しい問いを補助線として導入しておきたい。それは、我々にたいしてあることがらがいかにして表象されるのか、という問いである。これを便宜上、表象可能性にかかわる問い、と名づけておこう。

さて、時間の諸性質はいかにして表象されうるのであろうか。これまで問題にしてきた、時間が連続的であるかないか、あるいは、無限分割可能であるかないか、といったことを、そもそも我々はどのようにして認識したり理解したりしうるのであろうか。

カントは、時間の諸性質は、空間的表象の諸性質を媒介にすることなくしては表象しえない、と主張する。たとえば「超越論的感性論」には以下のような記述がある。

> この内的直観［時間］は形態を与えないのであるから、我々は、この欠落を類推によって埋め合わせようと努め、また、時間の継起を無限に進行する直線によって表象するが、この直線においては、多様が、一次元のみをもつ系列を形成するのである、そして、我々は、この直線の性質から、空間の部分は同時的であるが、時間の部分はつねに継起的である、ということ以外の、時間のあらゆる性質を推論す

るのである。（A33/B50）

この議論を受け入れるとするならば、今問題となっている時間の連続性もまた、直線などの空間的表象における連続性を媒介することなくしては、理解しえないことになる。

さて、ここで問うべきは、あることがらを時間的に分割していくということを、我々はどのように表象できるのか、ということである。時間は空間的表象を媒介しなければ表象できない、とカントは主張していた。そうであれば、我々は、時間の連続性や時間の無限分割を、そのものとして表象することはできない、ということになる。時間の連続性や時間の無限分割は、空間表象、たとえばある線の連続性であるとか、ある線の無限分割であるとかいったことがらを思い浮かべ、そこから類推することによってしか、理解されることはないのである。

表象可能性という論点の射程はこれだけにとどまらない。

「第二アンチノミー」においては、定立においても反定立においても、ある実体の実在性の分割が扱われている、と述べた。ここで注目すべきは、この実在性の分割が、徹底的に空間的表象に訴えてなされている、ということである。これまで強調してきたように、「第二アンチノミー」は、質のカテゴリーにかかわるものであり、その観点からすれば、分割の対象は現象的実体のもつ実在性であるはずだ。ところが、先に引用した定立および反定立において、カントはある実体が占める空間を分割しているかのような論の運びをしているのである。しかし、「第二アンチノミー」は空間的分割を扱うものではない。もし空間の分割が問題になっているのであれば、「第一アンチノミー」と同様に、対となる感性形式であるところの時間にかんして

も、その分割が同じような仕方で問題とされるはずだ。そうならないのは、ここではあくまで実在性の分割が空間の分割を媒介にして表象されているからだ、と考えなければならないだろう。では、なぜそうなるのか。カントは前批判期から、実体がある一定の空間を占めるということを、その実体がもつ不可入性という実在性から把握する、という発想をもっている。[19] これがまず理由として思い浮かぶ。しかし、それだけではないだろう。先に述べたように、時間の諸性質は、空間的表象を媒介にしてしか理解されえないのであった。それと同様に、実在性のような内包量にかんする諸性質も、空間という外延量の表象を媒介にしてしか理解されえないのではないだろうか。「第二アンチノミー」において、本来は不適切であるはずなのに、カントが実在性の分割を空間の分割に置きかえて語ってしまっているのは、そうしなければ実在性の分割という事態を表現することができないからなのである。

ここで、先に提起された問題に一定の回答を与えることができる。交錯していたかに見えた二つの基礎づけは、実はその内実がまったく異なるものである、と解しうるのだ。

実在性の連続性は、分割の無限反復に基礎づけられている。このときの基礎づけは、表象可能性にかかわる問いの文脈に属していると解しうる。実在性が連続している、ということを、我々はそのものとしてどう理解したらよいのかわからない。実在性が無限に分割しうるということを媒介してはじめて、実在性が連続性している、ということがらは我々にとって理解可能になる。そして、すでに確認したように、実在性が無限に分割しうる、ということもまた、そのものとして表象されることはない。空間的な無限分割になぞらえることによってはじめて、実在性の無限分割は表象されるのである。

さて、その一方で、実在性の連続性は時間の連続性に基礎づけられるとされているのであった。ここでの

基礎づけは、先ほどとはまったく異なるものである。これは、表象可能性ではなく、いわば存在論にかかわる基礎づけである。ある実在性をもつ実体は、それが我々にとっての現象であるかぎりで、直観形式としての時間に服している。そして、実在性が連続性を許すものであるならば、その形式である時間もまた連続性を許すものでなければならない。形式において連続性が可能でなければ、現象においても連続性は可能ではありえないからだ。これは、その形式のみが現象にア・プリオリな性質を与えうる、という、現象的実体にかんするカントの存在論からの要請なのである。

これら二つの異なる基礎づけ関係は、同時に成立しうるだろう。このように、二つの基礎づけの意味内容を区別することで、カントの主張を整合的に理解することができるのである。

（4）時間の流れの再構成的性格

では、結局のところ、カントにとって「時間が流れる」とはどのようなことなのか。これまでの考察を踏まえてまとめておきたい。

我々は、時間の流れをそのものとして体験しているように思うかもしれない。しかし、これは錯覚である。時間の連続性をそのものとして表象することはできないからだ。時間の連続性は、我々がなんらかの実在性を連続的なものとして把握するときに、そのような実在性の連続性を形式として基礎づけるものとして、要請されるのである。ところで、実在性の連続性は、統制的理念に導かれた無限分割という表象を媒介することなしには、理解できないものであった。ここから以下のように結論づけられる。

結局のところ、我々に与えられているのは、所与の実在性を無限に分割せよ、という指令だけである。実

在性の連続性は、この指令において理解される。そして、時間の連続性は、そのような実在性の連続性のいわば可能性の条件として要請される。つまり、我々にとって、時間の流れは要請されるものであり、体験されるものではない。

これは、時間論にかんする重要な主張を導く。時間の流れは、つねに過ぎ去ってしまった流れ、流れてしまった流れとして、事後的に再構成されることになるのである。

分割されるべきものごとがいかにして与えられるのか、ということを考えてみよう。「第二アンチノミー」におけるカントの記述は以下のようなものだ。

> […]というのはそれらの諸条件（諸部分）は、その条件づけられたものそのものにおいて含まれているからであり、また、この条件づけられたものはその限界のあいだに囲まれた直観において全部与えられているゆえ、それらの諸条件はことごとくこの条件づけられたものといっしょに与えられているからである。（A523f/B551f.）

分割においては、分割されるものの全体がまずもって与えられていなかればならない。上の引用にあるような空間的に表象された分割においては、これは当然のことであろう。まずもって全体が全体として与えられたうえで、分割は行われる。分割に先立って、全体の両限界がともに我々に現前しているのである。

しかしながら、時間的な分割においては、事情は異なる。当然のことながら、時間的に分割すべき現象は、時間的な幅をもたねばならない。そして、そのような時間的な現象は、これまた当然のことながら、継起的

に与えられるものであり、けっして一つの直観において一挙に与えられるものではないだろう。それが一つの直観として表象されるのは、既に起こってしまった出来事を想起したり、すでに完結してしまった出来事の軌跡を振り返ったりする場合、あるいは、そのような想定のもとで出来事を表象する場合のみである。

このことは、分割すべき現象が実際に我々に与えられる仕方は、時間の連続性あるいは時間の流れとは関係しない、ということを導く。我々は、さまざまな現象が時間の流れに沿って連続的に与えられている、と思うかもしれない。しかし、そうではないのである。問題の現象の与えられ方そのものがどのようなものか、ということは、我々にとって意味をもつものとしての時間の流れとは無関係である。現象が与えられる仕方ではなく、与えられてしまった現象のあり方について、時間の流れは語られるものなのだ。

時間の流れは事後的な再構成としてのみ理解される、という主張は、時間論にかかわるこのような帰結を導くのである。

おわりに

これは奇妙な帰結である。時間が流れる、とは、まさに今我々が体験していると感じている時間の流れをこそ指して語られるべきものだと思われるからだ。

カント解釈を離れてみれば、少なからぬ論者が、事後的な再構成からは時間の流れを理解することはできないと考えている。まさに今体験されているものこそが、真の時間の流れであり、再構成から得られた時間理解は、流れを流れとして示しえぬがゆえに非本来的なものにすぎない、というわけだ。[20] しかし、カントはまったく逆の発想に立っている。我々にとっての時間の流れは、事後的な再構成においてこそ示されるので

ある。我々が今まさになにかが流れている、と信じているとしても、この信念は、再構成から得られた理解を現在の体験に投影することによって成立しているものにすぎないのだ。再構成を離れての時間について語りは、カントにとっては意味をなさない。すでに確認したように、時間の性質そのものを我々が直接的に表象することはないからだ。再構成を離れた真の時間のありようについて語る言説は、カントの本来の用語法とは少々ずれるが、独断論的なものとして退けられねばならないのである。(21)

註

（1）『純粋理性批判』からの引用は、慣例に従い、第一版をA、第二版をBで示し、その後に頁数を記す。訳文中の大括弧［…］内の記述は滝沢による補足である。

（2）このような方向からの時間論としては、たとえばマクタガートの議論などを想起されたい。J.M.E. MacTaggart, "The Unreality of Time", *Mind 17*, 1908, pp.457-484.

（3）ショーペンハウアー「充足理由律の四方向に分岐した根について」『ショーペンハウアー哲学の再構築』所収、鎌田康男、齋藤智志、高橋陽一郎、臼木悦生訳、法政大学出版局、二〇〇〇年、pp62-63.ただし訳語の一部を本稿の用語法に合わせて変更した。

（4）連続性を含めた無限にかかわる概念一般の哲学史的な位置づけにかんしては、以下の文献を参照されたい。A. W. ムーア『無限 その哲学と数学』、石川多門訳、東京電機大学出版局、一九九六年。

（5）飛ぶ矢の例を使ったが、この理解は、ゼノンの飛ぶ矢のパラドクスの解釈としては妥当しないものである。ゼノンの運動のパラドクスの諸解釈については以下の文献が参考になった。山川偉也『ゼノン四つの逆理』、講談社、一九九六年。

（6）「第三類推」において、空間的共在関係が同時性という時間的関係として捉えられることを想起されたい。（A211ff./B256ff.）また、逆に言えば、時間的に表現されえない分節化はカントにとって多様性とはなりえない。多様性を語るさいに、たとえば舟が形相と質料からなるという場合の数多性や、共通感覚における感覚の数多性について、カントは言及することはない。ひとつには、これは、これらの諸表象の区別が時間的な区別に裏打ちされていないとカントが考えているからだと考えられる。

（7）質のカテゴリーは判断表における質に対応する。本稿では省略したこの論点を重視する解釈としては以下のものがある。Beartrice Longuenesse, *Kant and the Capacity to Judge*, New Jersey: Princeton University Press, 1998, Chapter10.

（8）これは第二版の記述である。第一版においては以下のようになっている。「あらゆる知覚をそのようなものとして予料する原則は、以下のものである。すなわち、あらゆる現象において、感覚は、そして、その感覚に対象において対応する実在的なもの（フェノメノン的実在性）は、内包量を、つまり、度をもつ」。（A166）

（9）感覚のもつ度と、感覚に対応する実在性の度との関係と差異については、解釈上の問題があるが、本稿では扱わない。ちなみに前註で挙げた両版間の表現の差異も、ここに連関してくる。ロングネーズはコーヘンの古典的な研究を引きながらこれを論じている。Longuenesse, *Kant and the Capacity to Judge*, 1998, pp.318-320. Cf. Herman Cohen, *Kants Theorie der Erfahrung*, Berlin: B. Cassirer, 1918.

（10）ここで、本当にそうなのか、と問うこともできる。感覚についても実在性についても、ア・プリオリを自称するカントの主張が、現代の生理学や物理学の知見と折り合うのかには疑問が残る。この問題は

重要であるが、本稿の関心の範囲を超えている。

（11）この箇所では外延量と内包量がともに構想力の綜合に基づいているとされている。

（12）このような基礎づけを問題視し、計測の場面に定位して、カントから別の論証を読みとろうと試みる解釈に以下のものがある。Paul Guyer, *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, pp.199-200.この論点もまた、後に検討する時間の空間化の必然性の問題に連関しうる。一般に、計測の問題は時間論において非常に重要な位置を占めるのだが、本稿では扱いえなかった。

（13）ここで問題になるのが、感覚そのものが時間的ではないことである。たとえば以下のようにカントは語る。「把捉は、ただ感覚に媒介され、一瞬間しか満たさない（すなわち、私が多くの感覚の継起を考慮しないときには）。」（A167/B209）すなわち、感覚が与えられることそのものは「時間の連続性」に基礎づけられているとは言い難いのである。この点についてはカントの主張を、少なくとも与えられた感覚を数学的に処理可能な内包量として記述するためには、我々は「時間の連続性」に訴えねばならない、というものと解釈することができる。ここには、質のカテゴリーで記述されなければ感覚は我々にとっての感覚たりえない、という前提が見てとれるだろう。

（14）たとえばマッキーは因果関係の同時性の問題を重要なものと認めつつも、ここでのカントの説明を完全に切り捨てる。Cf. John Mackie, *The Cement of Universe*, New York: Oxford University Press, 1973, p.109.

（15）註（10）と同様に、この主張が正しいかどうか問うこともできるだろう。さらに言えば、カント自身の自然哲学との関係も考慮に入れて解釈はなされるべきである。この点についての比較的新しい研究とし

ては以下のものがある。Eric Watkins, *Kant and the Metaphysics of Causality*, Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

（16）David Hume, *Treatise of Human Nature*, ed. L. A. Selby Bigge, revised by P. H. Nidditch, Oxford: Oxford University Press, 1978, p.31.

（17）カントのこのような問題意識は前批判期に遡ることができる。『自然的単子論』（一七五六年）などを参照されたい。カントにとって、空間の無限分割可能性の問題は、モナドロジーのパラダイムを出発点にしているのである。

（18）ちなみにカントは不定 in indefinitum 背進と無限 in infinitum 背進とを区別し、前者を「第一アンチノミー」に、後者を「第二アンチノミー」に割り振るが、この論点については本稿では強調しなかった。(A524/B552)

（19）たとえば『視霊者の夢』（一七六六年）に見られる心身問題の扱いなどを参照されたい。

（20）たとえばベルクソンや大森荘蔵である。Cf. ベルクソン『時間と自由』中村文郎訳、岩波文庫、二〇〇一年。大森荘蔵『時間と自我』、青土社、一九九二年。

（21）類似の論点を示した論考に以下のものがある。中島義道「持続と時間のあいだ ベルクソンの誤り」、『現代思想 九月臨時増刊号 ベルクソン』所収、青土社、一九九四年、pp233-239。